

## vivo

1&amp;2

JANUARY/FEBRUARY  
2006

## CONTENTS

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| ニュー・イヤー・コンサート 2006 ..... | 1.2 |
| ちょっとお昼にクラシック 5 .....     | 2   |
| オペラの花束をあなたへ 17           |     |
| 幻想のルチア .....             | 3   |
| 現代音楽を楽しもうXIX             |     |
| パーカッション・ミュージアム .....     | 4   |
| SELF PORTRAIT 茂木立真紀;     |     |
| 白相まどか・大内田奈名子・城戸春子        |     |
| 最近の公演から .....            | 6   |
| ネットマ & Petite 情報 .....   | 7   |
| インフォメーション .....          | 8   |



写真上;ニュー・イヤー・コンサート2005  
写真下・左;幻想のルチア  
写真下・右;パーカッション・ミュージアム

## 芸術館の誇る“ Stars”が奏でる、星たちへの願い。

1 / 5(木)ニュー・イヤー・コンサート2006“ Stars Play Stars ”

皆様にとって、2005年はどんな年でしたか。昨年末のvivoに掲載したニュー・イヤー・コンサート2005の記事で私は、「災厄や戦争、犯罪など暗いニュースが多い世相だからこそ、新しい年にむけて希望の光を灯したい」といったことを書いています。その気持ちは、新しい2006年を迎えるに当たっても 残念ながら 変わりありません。今年も、思い起こせば数多くの胸の痛むニュースばかりが印象に残りますし、世界が平和に向かっていとは、とうてい思えない現状です。

だからこそ私たちは人間を信じたいと思いますし、美しい音楽に託された美しい心を信じたいと思うのです。「ニュー・イヤー・コンサート2006」、今回のテーマは「星」。太古、神という概念がまだなかった時代から、人間は、はるかな星々のまたたきにさまざまな神々の物語を思い描いたり、星に願いをこめて祈りを捧げたりしてきました。また、天体の運行の不思議で厳密な規則性に、音楽の理論を平行させて考える思想も現れました。音楽と星たちとの妙なる調和に思いをさせながら、新しい年に幸多かれと願う、そんな演奏会が「ニュー・イヤー・コンサート2006“ Stars play Stars”」なのです。

タイトルをご覧になられてお気づきの通り、主語

として書かれたStarsには、もちろん芸術館が誇る専属楽団の「スター」たちの意味があります。スターたちが奏でる星の音楽、というわけです。なんといっても最大の話は、おなじみの名手たちに加え、前回の大好評を受けてソプラノの森 麻季さんが登場すること。先日行われたソフィア国立歌劇場の《リゴレット》公演でも大喝采を浴び、いまや一等星の輝きを放つこの歌手の登場に、期待で胸をときめかせている方もたくさんいらっしゃるでしょう。チラシに掲載した名前の中ではさらに、ハーブの吉野直子さんが1996年以来10年ぶりにニュー・イヤー・コンサートに登場することを、楽しみにされている方も多いに違いありません。そのほか、専属楽団メンバー以外のゲストとしては、昨年に続いての登場となるヴィオラの川本嘉子さん、3年連続登場、いつも大車輪の活躍をされているピアノの野平一郎さん、2004年のニュー・イヤー・コンサート以来2年ぶり2度目の登場となるオルガンの高橋博子さんなど、今年も豪華な布陣です。さらにチラシができてから、新たに3人のゲストが決まりました。まず、クラリネットの濱崎由紀さん、打楽器の深町浩司さんという、水戸室内管弦楽団やATMアンサンブル演奏会のゲストとして何度か登場されているお二人。お二人

とも、今年の夏、水戸室内管弦楽団第62回定期演奏会の際に千波湖畔の「千波公演ふれあい広場」で行われた「大スクリーン・コンサート」において、終演と共に千波湖畔にかけつけ、会場を大いに盛り上げるパフォーマンスを披露してくれました。また、フルートには、2004年に行われた第73回日本音楽コンクールのフルート部門で第一位を受賞された渡辺玲奈さんが初登場します。新しい年にふさわしい期待の新星の登場です。司会はNHKの人気アナウンサー、杉浦圭子さんが登場する予定です。

さて、音楽。今年も3回目となる「大吉リクエスト」を実施し、「あなたが「星」から連想するこの1曲」というテーマのもと、皆様からたくさんのリクエストをいただきました。「やっぱり来たか!」とうなずかされる有名曲から、「ふむふむ、なるほど」とうならされるひねった曲まで、さまざまな曲を皆さん挙げていただきました。どんな曲が登場するかは当日のお楽しみですが、例によって年末年始のお楽しみのために、いくつかのヒントを出しておきましょう。まず専属楽団メンバーによって構成された、いわゆる「ニュー・イヤー合奏団」が演奏する作品。今年ちょっと凄いです。MCOのフル編成をもってしても演奏できないあの組曲の中

写真左から；  
久保陽子、中村静香、  
堀了介、弘中孝



の、あの有名曲を演奏してしまう予定なのですが、もちろんそのままでは演奏できないので、頼もしい方に室内アンサンブル版への編曲をお願いしました。作曲家・音楽評論家として活躍され、野平一郎さんの奥様でもある、野平多美さんです。野平さんにはもう一曲、(意外にも大吉リクエストでは挙がらなかったのですが)星を扱ったある舞曲の室内アンサンブル版への編曲もお願いしています。どちらももちろん世界初演です！指揮はもちろん、恒例のあの入です。 専属楽団メンバーやゲストによるソロもいろいろ盛りだくさん。中南米の作曲家が書いたそのものずばりのタイトル

の曲や、星に祈りを捧げる宗教的鍵盤曲、はては作曲家本人のあざかり知らぬところで星の名をつけられてしまった変奏曲などなど…。さらに「星」にとどまらず、「夜」や「祈り」のイメージを持った曲も登場し、星々の音楽の世界にいつその拡がりをもたらします。「星」の音楽って、スタンダード・ナンバーに多いんですよね…。あなたの聴きたいあの曲も、思いがけぬ形で登場するかもしれません！ 森 麻季さんもスペシャルな曲を選んでくれています。特に、なかなかの大曲、知られざる名曲が今回は登場するので、これもご期待いただきたいですね。

以上、チケットご購入はお早めに…ええっ、もう売り切れた？ そうなんです。今回は発売からひと月以内にチケット完売といういつも以上の大人気。ありがとうございます。入手しそくなって残念、という方には朗報を。NHKの茨城県域デジタル放送で、生中継される予定です。お問い合わせはNHK水戸放送局(TEL029-232-9885)までどうぞ。

今年は、MCOの5年ぶり、3回目となるヨーロッパ・ツアーも予定されています。その壮大なる旅路への序章として、この輝かしい星たちの饗宴を、どうぞ心ゆくまでお楽しみください！ 《矢澤》

## MCOなどでお馴染みの練達の演奏家たちが競演します。

2 / 14(火)ちょっとお昼にクラシック5 ピアノ四重奏・夢弦旅行

「ちょっとお昼にクラシック」のシリーズは、平日の午後に開催する1時間のコンサートです。クラシック音楽にはあまり馴染みの無い方々でも気軽にお楽しみいただける親しみやすいプログラムと演奏時間、クラシック音楽を深く愛する方々にもご満足いただけるとびきりの演奏 この両方を兼ね備えることで、ご好評をいただいております。

今回は、「ピアノ四重奏・夢弦旅行」というタイトルで、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ピアノという編成でお贈りいたします。出演は久保陽子さん(ヴァイオリン)、中村静香さん(ヴァイオリン、ヴィオラ)、堀了介さん(チェロ)、弘中孝さん(ピアノ)の4人。弦楽器奏者の3人は、水戸室内管弦楽団(MCO)での活躍などで、お馴染みの方も多と思います。実はこの3人は、今年トリオ・ジョワイユという弦楽トリオを結成し、東京オペラシティ・近江楽堂での第1回コンサートを皮切りに活動を展開しています。そして、ピアノの弘中さんは、ソロ活動に加え、久保さんも参加する桐五重奏団(MCOの店村さんもメンバーです)などアンサンブルでも活躍されている練達のピアニストです。勿論、弘中さんは、久保さんばかりでなく、中村さんや堀さんとも旧知の間柄です。久保さん、堀さん、弘中さんの3人のピアノ・トリオで2006年1月には、水戸芸術館でCDのレコーディングも予定されています。したがって、今回のコンサートでは、それぞれのソリストとしての腕前が発揮されるばかりでなく、一朝一夕では成し遂げられない、

まさに息の合ったアンサンブルが披露されることになります!!

プログラムは、各楽器の独奏曲から出演者全員によるピアノ四重奏曲まで、さまざまな楽器編成を味わっていただけるものとなっています。まずはトリオ・ジョワイユの3人が登場し、ドホナーニの「セレナード 作品10」のマーチの楽章で颯爽とコンサートの幕が明きます。続いて、中村静香さんのヴィオラ独奏でヴェータンの「無伴奏ヴィオラのためのカプリッチョ」。中村さんは3年前よりヴィオラの魅力の虜となり、トリオ・ジョワイユでもヴィオラを担当しています。「今、ヴィオラを弾くのがとても楽しい」と語る中村さんのヴィオラ演奏にご期待ください。チェロの堀さんの独奏曲は、サン＝サーンスの「白鳥」とヴィラ＝ロボスの「黒鳥の歌」という、鳥つながりの洒落な選曲です。弘中さんのピアノ独奏では、ドビュッシーの「花火」が演奏されます。初夏のパリ祭で打ち上げられた花火の光景が描かれています。久保さん、中村さんによるヴァイオリン二重奏でお届けするのはバルトークの「44の二重奏曲」です。さらに、久保さんのヴァイオリン独奏には、パガニーニの「パイジェットの『水車屋の娘』の「うつろな心」による序奏と変奏曲」を弾いていただくことになりました。久保さんは、「ちょっとお昼」の第2回公演(2003年)にも出演していただいているのですが、その時もこの曲が取り上げられ、ブラヴォーの声が飛び交う名演が繰り広げられました。あの名演に再び私たちは接することができるのです!! 演奏会の

掉尾を飾るのは、「ちょっとお昼」史上、最大編成!となるブラームスの「ピアノ四重奏曲 第1番」の終楽章の演奏です。多くの人から愛されている有名な楽章で「ツイゴイナー風ロンド」と作曲家の手で記されています。息の合ったアンサンブルをお楽しみください。

1ドリンク付きで1,200円!! 託児サービスもご用意しておりますので、小さなお子様がいて、なかなかコンサートに行けないというお母様もどうぞお越しください。さらに、今回は館内レストラン「ヴェールブランシェ」の協力で、チケットをお持ちの方は2月1日から28日まで、同レストランのランチもしくはディナーに10%の割引価格でご優待します。是非、こちらをご利用ください。

《中村》

\*託児サービスをご希望の方は、1月24日(火)までに水戸芸術館音楽部門・担当:中村、馬場宛てにお電話ください(TEL:029-227-8118)。定員20名・料金500円 定員になり次第、締切らせていただきますので、お申し込みはお早めにごうぞ!!



写真左から; 畑中良輔、佐藤美枝子、望月哲也、河原忠之、岩田達宗

## 人気ソプラノ・佐藤美枝子が、一途な愛を貫いた女性の悲劇を演じ、歌う。 2 / 3(金)オペラの花束をあなたへ - 17 佐藤美枝子の《幻想のルチア》

畑中良輔の企画による人気シリーズ「オペラの花束をあなたへ」。今回の《幻想のルチア》は、「ホール・オペラ」形式の上演となり、岩田達宗の卓抜な演出により、水戸芸術館コンサートホールATMが、一途な愛を貫いた一人の女性の生き様を追う緊迫した舞台空間と化します。

ドニゼッティのオペラ

そもそも、《幻想のルチア》とは佐藤美枝子と岩田達宗が独自のハイライト版を作ったときに考案した演目名であり、本来は、ガエターノ・ドニゼッティ作曲の歌劇 ランメルモールのルチア というのが正式なオペラのタイトルです。

ガエターノ・ドニゼッティ(1797~1848)は、セピリアの理髪師で有名なジョアッキノ・ロッシーニ(1792~1868)や名作 カブレーティとモンテッキを残したヴィンツェンツォ・ベッリーニ(1801~1835)と競うように、歌手の名人芸を發揮させ、聴衆の耳の悦楽をまず第一に考えた、いわゆる「ベルカント・オペラ」を数多く書いた作曲家です。アンナ・ボレーナ 愛の妙薬 ルクレツィア・ボルジア といったオペラは、その代表作です。

ところが、競うような状況はそれほど長続きしません。ロッシーニは1829年初演の ウィリアム・テル をもって舞台作品とは縁を切ってしまう、ベッリーニは1835年に34歳という若さで急逝してしまうからです。

イタリア・オペラ界を一人で背負って立つことになるドニゼッティが、気概をこめて綴ったオペラがランメルモールのルチア(1835年初演)です。このオペラでは、至難な技巧の限りを尽くすヴィルトゥオジティが、愛のもつれから狂乱へといたる主人公ルチアの心理と密接に結びついており、単なる耳の悦楽からは完全に抜け出ています。(あらすじは別記)

まもなく、イタリアには国民的大オペラ作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ(1813~1901)が登場することになります。しかし、ランメルモールのルチアの「あの人の優しい声が(狂乱の場)がなかったならば、リゴレットのジルダのアリア“慕わしい人の名は”も、椿姫のヴィオレッタのアリア“ああ、そはかの人か…花から花へ”も、違う形になっていたかもしれないのです。

佐藤美枝子と ルチア

水戸芸術館には、1996年オペラの花束をあなた

へ「リゴレット・ハイライト」、水戸室内管弦楽団第26回定期演奏会 ナクス島のアリアドネ(指揮:若杉弘) 2003年オペラの花束をあなたへ「椿姫ハイライト」で登場し、澄んだ美声と輝かしいコロラトゥーラで聴衆を魅了した佐藤美枝子。その佐藤美枝子と ランメルモールのルチアの「狂乱の場」は切っても切れない縁があります。

佐藤美枝子を世に送り出したのが、この「狂乱の場」であると言っても過言ではないからです。1995年の日本音楽コンクールで、このアリアを歌って優勝。さらに1998年のチャイコフスキー国際音楽コンクールも、このアリアで制覇しました。サザード、グルペローヴァなど、この超絶技巧を伴うアリアを見事に歌い切れるのは世界でも限られた名歌手のみ。以来、どこに行っても、佐藤美枝子といえば「狂乱の場」がリクエストされるようになるのは当然のなりゆきでしたが、佐藤美枝子自身はこう発言しています。

『**単独でも素晴らしいアリアですけれど、やはり狂乱に至る全体の流れを見たらうて聴いてほしい。なぜ彼女が狂っていくのか。自分の恋人と結婚できず、兄の策略で政略結婚させられ、恋人の怒りがかかってしまう。狂わざるをえない、その過程に、切なく苦しい感情があり、それだから狂っていく彼女に聖なるものすら感じられる。**

ルチアは弱いから狂うのではない。弱いなら「仕方ない」と流されたと思う。当時でも今でも、**愛を貫き通すのはいかに大変なことか。彼女は愛を貫く強さゆえに狂う。そういうルチア像を打ち出したい。現代の社会が打算的だからこそ、この強さにひかれます。』**

ルチアの悲劇をこのようにとらえる佐藤美枝子が、信頼する演出家・岩田達宗と組んで、ルチアの情念の動きに的を絞って構成したハイライト版が《幻想のルチア》となります。

演出家・岩田達宗

演出の岩田達宗とも、水戸芸術館は浅からぬつながりを持っています。オペラ演出の名匠・栗山昌良に師事していた岩田達宗は、1993年の市民オペラ 魔笛、1995年の同 フィガロの結婚で栗山昌良の意を受け、演出助手を担当しました。オペラの舞台は初挑戦という人も多く参加する市民オペラで、数ヶ月にも及ぶ稽古期間、舞台狭しと走り回りながら、大きな声で人物の動きとその

動きに至る必然性を参加者に説明していたのが思い出されます。

芸術総監督の畑中良輔からその仕事ぶりを買われ、1996年のオペラの花束「リゴレット・ハイライト」では演出を担当。限られた舞台空間を逆手に取り、娘を奪われたリゴレットの心の動き一本に的を絞った演出で好評を得ました。

その後の活躍ぶりについては、ここに記すまでもないでしょう。新国立劇場小劇場での オルフェオとエウリディーチェ シャーロック・ホームズの事件簿～告白をはじめ、数々の舞台ですぐれた独創性を發揮し、「気鋭の演出家」と評価されるにいたっています。

佐藤美枝子のほか、注目の若手テノール・望月哲也(エドガルド役)、オペラを知り尽くしたピアニスト・河原忠之(ピアノを弾くだけでなく、エンリーコ役として芝居にも加わります)というあつい信頼で結ばれたキャストたちとともに、9年ぶりに水戸芸術館の舞台を手がける岩田達宗の演出にも、大いに注目したいところです。

《関根》

……………

【あらすじ】

……………  
ドニゼッティ:歌劇 ランメルモールのルチア  
……………

ルチアは、母の墓地の小道で猛牛に襲われたとき、救ってくれた男エドガルドと恋に陥った。エドガルドは、今ではランメルモール地方の領主となったルチアの兄エンリーコに父を殺され、城も財産も略奪された過去があるため、エンリーコへの復讐を心に期している。しかし、それさえも、ルチアとエドガルドの愛を引き裂くことは出来ない。

妹の恋の相手が宿敵エドガルドであることを知ったエンリーコは、エドガルドの偽の筆跡で彼の心変わりを伝える手紙を用意し、ルチアを失望でふるえ上がらせ、様々な術策を講じ、領地内で勢力を誇っていたアルトゥーロ卿と政略結婚することをルチアに承諾させてしまう。

結婚式の日、突然、エドガルドが現れる。ルチアは、不実を責められ、かつてエドガルドと交換し合った指輪を踏みつけられ、気絶してしまう。光明の見えない愛に苦しむ、ついに狂乱へといたったルチアは、夫となったアルトゥーロを殺し、幻の中にエドガルドとの美しい日々を思い出す……。



## パーカッションのミュージアムへようこそ! 対談:池辺晋一郎 + 菅原 淳 2 / 11(土・祝)現代音楽を楽しもう - XIX パーカッション・ミュージアム

池辺:僕はここで、「現代音楽を楽しもう」というシリーズをずっと行って、今回は水戸の皆さんに打楽器をうんと楽しんでもらおうと思ひまして、パーカッション・ミュージアムの方たちにご出演をお願いしました。パーカッション・ミュージアムは、設立当初からよく知っています。委嘱作品を書いてもいますし、とても親しいグループなのです。とりわけ、その中心にいる菅原淳さんは、本当に若い頃から、いわば仲間で、色々な音楽シーンと一緒に仕事をしてきました。非常に信頼している、打楽器の親分であります。それで今回は、パーカッション・ミュージアムの特徴を、一番よく出せるようなプログラミングをと思ひました。まず、パーカッション・ミュージアムのコンサートでは、いつも菅原さんが編曲した大きなオーケストラの曲を演奏して、まさかそれが打楽器だけでできるとは、ちょっと想像できないようなものをやるから、すごく面白い。それを入れようと思ひました。それから、かつて僕がパーカッション・ミュージアムのコンサートで聴いて面白かったジョン・ケージの居間の音楽です。音楽と言ひながら、他の要素もいろいろ含んでいるもので、それを見事にやってしまう打楽器奏者たちを、是非ご紹介したいと思ひ選曲しました。それから、僕の曲もありますけれど、たぶん楽しんでいただけると思ひ、あと2人の日本人作曲家・福士則夫と北爪道夫の作品。2人とも僕はよく知っていて、2人とも非常に打楽器の曲を得意としている作曲家です。つまり、今回はその名の通り、パーカッションのミュージアム、博物館を色々楽しんでいただく、というふうにならしてあげたつもりです。

[パーカッション・ミュージアムについて]

池辺:打楽器のグループは、70年代頃から数多く結成されるようになって、特に日本は打楽器の優れた奏者が大勢出ています。打楽器の演奏において、いつの間にか日本は非常に優れた国になったと思ひます。そして、その中心にいる菅原さんをはじめ何人かの人たちが、多くの演奏者たちを牽引してきています。パーカッション・ミュージアムの面白さというのは、ある種の色彩感だと思ひます。ある意味では、打楽器はモノクロームの世界です。オーケストラがたいへんカラフルな世界だとすれば、打楽器は、モノクロを楽しむものだったのですけれども、パーカッション・ミュージアムの登場によって、打楽器の色彩感というものが前面に

押し出されたのではないと思ひます。まさにミュージアムとしての様々な世界を、もの凄くカラフルに見せ、聴かせてくれるのが、魅力だと思ひます。

菅原:打楽器の原点に戻って、本当にシンプルな曲を演奏したいという思ひが、ケージ作品を含めて、ありますね。それから、打楽器のアンサンブルという分野は、これから開拓されていくものであるから、現代の作曲家に委嘱をして、曲を作って欲しいということがあります。それから、もう1つオーケストラの名曲を打楽器にアレンジして、そういう広がりや、そういう楽しさを、深刻な、シリアスな音楽ばかりではなくて、楽しさを前面に出したい。僕の願ひである、その3本柱で活動してきました。

[プログラム]

菅原:先程、池辺さんがおっしゃった内容で、大体集約されていると思ひますが。ジョン・ケージは、偶然性の音楽というものを書いた作曲家で、居間の音楽は、ごく一般的な家のリビングにあるものを使って演奏を行う作品です。たとえば、ソファ、椅子、テーブル、ティーカップ、新聞紙、本など、そこら辺にあるものを、叩くなどして演奏します。この作品にはストーリーがあり、英語の会話の中でリズムを作っていきます。

福士則夫さんのクラッピング・リズムも、楽器は使わない作品で、要するに、ボディ・ミュージックっていうのかな、手や足などの体を使って、複雑なリズムを作り出します。これもきつと楽しんでもらえると思ひます。

池辺さんの雨のむこうがわでは、4人の打楽器奏者で演奏します。この作品は、ぐつと趣きが変わって、日本的な楽器が使われています。チャップ、びんざら、魚板、木鉦などです。

北爪道夫さんの森の声は、本当に響きを大切にした曲です。舞台上に6人、舞台とは別の所に4人の奏者が現われます。この異なる場所から発せられる響きの対話のようなものがあり、それが森の雰囲気を作り出します。使われる楽器は、沢山のトムトム、それとウッドブロック類です。

池辺さんのもうひとつの曲がテンテンイダテンです。この曲のタイトルの韋駄天は、足の速い神様のこと。奏者は10人で、全員がトムトムを3つとボンゴなどを持っています。だから楽器の量は凄いですよ。そして、「テンテンイダテン」というリズムがあって、テンテンイダテン、テンテンイダテン、テンテンイダテンというふうが続くのです。

池辺:タイトルがすなわちリズムになっているのです。菅原:最後がバーンスタインの、有名な「ウェスト・サイド・ストーリー」。この曲は色々なアレンジがありますけれど、僕は、有名な部分を打楽器だけのアンサンブル用に編曲しました。使う楽器としては、マリンバ3台、ヴィブラフォン、シロフォン、グロッケンシュピール、チャイム、ティンパニ、クロマティック・ゴング、ボンゴ、コンガ、トムトム、シンバルというように全ての打楽器を網羅している。そして、本来はティンパニなどメロディを奏する役割ではない楽器にまで、メロディを奏させています。

[打楽器の台頭]

池辺:20世紀の特に後半になって、打楽器は音楽シーンの主役に躍り出たと思ひます。福士則夫の今回の作品はボディ・ミュージックだと言ひたれども、つまり、体だって打楽器になるし、ケージ作品も何だって楽器になることが証明されるような曲ですよ。そういう意味では、打楽器奏者は、本当に自由な精神をもっていないとできないと思ひます。「これはやりません」なんてことは言えない。叩くだけではなくて、こするし、時には、ピリピリと笛を吹くこともあるし、足踏みもするし、肉体も使うし、もう何でもやらなくては打楽器奏者ではないというふうになってきたと思ひます。そして、このことを一番洗刺と行っているのが、パーカッション・ミュージアムだと僕は思ひます。それを是非楽しんでもらいたいと思ひます。さらに、彼らの演奏には、視覚的な要素、演劇的な要素もあると思ひます。だから、パーカッション・ミュージアムは優れたCDを数多く出しているけれど、コンサートでなければ味わえない楽しさが、いっぱいあると思ひます。

[水戸の聴衆へのメッセージ]

菅原:今度の公演は、まさにミュージアムです。楽器がもの凄く量なんです。4トラックにいっぱい積み込まれてきます。どんな楽器がいっぱいあるのか、もう大変な騒ぎになると思ひますけれど、楽しみにして下さい。

池辺:僕はチラシに書いたことを、もう1回しつこく言ひたいけれど、皆さん、コンサートホールに入る前にトイレかどこかでご自分の顔を見て、そして終わった後もう1回ご覧になってください。きつと違う顔になっていますよ!(笑)

《編集:中村》

\*水戸芸術館のホームページで、本対談の完全版を掲載しています。



写真左から;茂木立真紀、  
白相まどか、大内田奈名子、城戸春子

SELF

PORTRAIT

ドイツに学び、「ロータス弦楽四重奏団」の一員としてCDをインターナショナル・リリースしたこともある気鋭のヴァイオリン奏者、茂木立真紀。得意のドイツ音楽プログラムをピアノの手塚充代と共に奏でます。

1/21(土)  
茂木立真紀  
ヴァイオリン・  
リサイタル

「ドイツ」という言葉から皆様は何を想像しますか？ドイツは寒く曇が多い感じ・古いお城が沢山ある、クリスマス市??それとも2006年のサッカーのワールドカップの地?等でしょうか?音楽家の人々はやはり大作曲家、演奏家の生誕地・活動地と思いつかるのではないのでしょうか?

今年2005/06は日本におけるドイツ国の年にあたります。様々な催し物(美術、スポーツ、音楽、映画...)が日本各地で行われています。私も幾つかの演奏会に行って英気を養ってきました!

その「ドイツ」で数年間、音楽の勉強と演奏活動を行い、日本へ帰国後、水戸に住み3年が経ちます。今回、水戸で初のリサイタルを開くので、テーマはずばり「ドイツ・ヨーロッパの作曲家達」にしました。ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第8番 長調 作品30の3、パッハ:シャコンヌ、クライスラー: プニャーニの様式による前奏曲とアレグロ 愛の悲しみ 愛の喜び、ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ 第3番 二短調 作品108 を選曲致しました。

ドイツでの生活は初め孤独でしたが(ドイツ語勉強不足の為?) 毎日時刻を知らせる教会の鐘の音、毎週行われる教会でのミサ、儀式そしてお祭り。すべて初体験でしたが、体当たりで飛び込んだ生活も1年が過ぎる頃には、あたりまえに思える程、周囲の人々とも親しくな

りドイツそのものが私を暖かく受け入れてくれるようになりました。そしてそこには必ず「音楽」がありました。

日本ではまだ堅苦しいイメージが残っているクラシック音楽ですが、ドイツでは生活の一部に音楽がいつも手の届くところに存在していました。今回取り上げた作曲家達も、あたりまえの様に生活の中に音楽があり、その中から甘い旋律、憂いのワルツ、どうしようもない自分の気持ち等を作曲していったのではないのでしょうか?

これらの大作曲家達と同じ土地に住み、人々の優しさに触れその土地の空気や色を、暖かさや寒さを感じられた事は、大変貴重な経験でした。

今回、私の音を通して皆様にも少しでも、その「ドイツらしさ」を感じて頂けたら嬉しく思います。

それぞれの楽曲における作曲家たちを春夏秋冬になぞらえてみました。明るく気分も高揚し出す春のベートーヴェン、大聖堂の中で荘厳に響く夏のパッハ、収穫の喜びや祭りで賑わう秋のクライスラー、そして暗い時間が長く寒い中、春を待ち焦がれる冬のブラームス。

このように、それぞれの季節とその風景を想像しながら演奏を聴いて頂けたらもっと楽しんで頂けるかもしれません!!

皆様と同じ時間をドイツ・ヨーロッパの音楽と共に過ごせる事を楽しみにしております!!

茂木立真紀

フランスで出会った若手演奏家たちが、故郷の水戸で、その修練の成果を披露します。

2/19(日)  
白相まどか  
大内田奈名子  
城戸春子  
トリオ・コンサート

今回、「MOMENT MUSICAL(モマン ミュジカル) ~音楽のひととき~」と題して、コンサートを開催する事になりました。記念すべき第1回目のコンサートを開催したのは、2004年の春、パリでした。そもそもこの3人が出会ったのは、私が留学している時でした。留学中、非常にお世話になった白相さん(白相さんなくして留学は出来なかった!!)と、一緒にデュオをしているうちにコンサートをしよう計画を始め、そのうちトリオもやってみよう、と、東京芸術大学附属高校からの同級生の大内田さんを誘いました。彼女は東京芸術大学に学んでいた時代から、ヴァイオリンを学びにパリと東京を行き来していて、現在はパリ在住。彼女も快く引き受けてくれて、こうして、3人での合わせが始まりました。初めてのコンサートのプログラムは、ブラームスのピアノ・トリオ、チェロとピアノのデュオで2曲、シューベルトのアルペジオーネ・ソナタ、そして今回も演奏するマルチヌー。休日の午前中にマルシェで買い物をした後、午後にはふらっとでかけてみよう、という感じでいらして下さった聴衆の方々との「音楽のひととき」は温かいもの

でした。

水戸芸術館では、フランスの作曲家の作品を、同じ時期にフランスで学んだ3人で演奏してみよう、と思い選曲しました。ショーソンのピアノ・トリオは、あまり知られていない曲ですが、情熱的な、それでいてポエティックな曲です。楽譜を入手するのが大変でしたが、フランスでなんとかみつけることが出来ました。今回は、チェロとピアノのデュオが3曲あります。フォーレのチェロ・ソナタは、余計なものがそぎ落とされたシンプルな音の中に、晩年のフォーレの思いの核のようなものが感じられると思います。ドビュッシーは華やかで、ユニーク。わくわくするような色彩が感じられます。パリでも演奏したマルチヌーはリズムが面白い。私たちが感じているフランスの「色彩」「感覚」「香り」が少しでもたくさん伝えられるような演奏をしたいと思います。

城戸春子

## 最近の公演から NOVEMBER



1



2



3



4



5



6

### 水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会 (11月5日、6日)

MCOがゲスト・ソリストと共演するとき、そこには当然のごとく一種独特のこころよい緊張感が生じるのだが、榎本大進を迎えての第63回定期演奏会はいささか趣を異にしていた。ソリストへの敬意はそのままに、よりリラックスし、しかも活気にあふれる。ヴェテラン揃いのMCOと若い榎本大進という関係のせいもあるだろう。しかしそれ以上に、この俊才が、飽くことのない情熱でMCOから多くのものを吸収しようとし、MCOもそれに全力で応えたことが、セッションを創造的なものとするに寄与していた。宮本文昭と共演したパッサ：オーボエとヴァイオリンのための協奏曲、師・田中直子がコンサートマスターを務めたメンデルスゾーンの協奏曲、いずれも生き生きとした対話の喜びにあふれていた。そしてMCOは、後半のショスタコーヴィチ(バルシャイ編曲)：弦楽器と木管楽器のための交響曲の10年ぶりの再演を指揮者なしで成功させ、貫禄を示したのだった。《矢澤》アンケートから ホールの響き、オーケストラの音色、スタッフの方々の対応、全てパーフェクトで水戸近辺にお住まいの方を羨ましく思った程です。MCOと榎本さんの音色が美しく重なり合い、極上の2時間をすごす事ができました(富津市:K.T.さん) 榎本さんの演奏、初めてですが、その生きが良く、明るく、サクツとした演奏、今後楽しみです(水戸市:Mさん) MCOのアンサンブルはもちろろん、宮本さんと大進のハーモニーが絶妙で、期待以上の満足度でした。東京からの2往復も苦になりません!また来ます!(東京都:M.H.さん) メンデルスゾーンの思いに溢れたヴァイオリンの音色、突然テンポを早めた3楽章は特に耳に残っています(東京都:S.T.さん) ショスタコーヴィチが最高でした(東京都:N.T.さん) ここでやる曲は知らないものばかりだけど、曲が始まるといきなりひきずり込まれて夢中になる。2時間があっという間です(A.S.さん)

### 水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会 (11月19日、20日)

第63回とは打って変わって、ブルーノ・レオナルド・ゲルバー(ピアノ)、ライナー・クスマウル(ヴァイオリン/ゲスト・コンサートマスター)という二人のマエストロを迎えた第64回定期演奏会。エグモント序曲 ピアノ協奏曲第3番 同第5番・皇帝の3曲が並んだオール・ベートーヴェン・プログラムは、MCO定期演奏会史上でも記念すべき重量感あるものとなった。二人のマエストロの、それぞれに歩んできた音楽人生の年輪の厚みと、今なお輝きと深さを増しつつけるその音楽は無類の説得力を持ち、MCOは心からの信頼と敬意をもって応えた。演奏の充実度という点でも、第64回定期演奏会は長く心に残る記念すべき演奏会の一つとなることだろう。《関根》アンケートから エグモント序曲:その生き生きとした明るい音色に目が、身体が覚めました。協奏曲第3番:ゲルバーさんとMCOとの四つ相撲。MCOが負けるかと思ったが、クスマウルさんのリードで堂々の四つ相撲。第5番:圧倒的な演奏。いう言葉もない。再度の演奏を!!(水戸市:Y.M.さん) はっきり言って感動しました。皇帝の第2楽章ではとどめなく涙が溢れました。ゲルバーの音は大ホール用(?)といった感もしましたが、とにかく重厚な響きには感動!! MCOがこんなにも引き締まっていながら、ドイツを感じさせてくれたことはなかったような気がします。コンマスの力量に敬服します。(ひたちなか市:N.K.さん) 大感激です!! 終始全身で集中して聴くことができました。いつまでも余韻が残りました。最高の音楽でした。(いわき市:Y.K.さん) 今日は大好きなベートーヴェンにどっぷり浸れて、最高の気分。ゲルバーの弱音は、絶妙の間と共に“ホロリ”とさせられる。(無記名の方) 素晴らしいです。ゲルバー氏の演奏、クスマウル氏の率いるオーケストラの演奏は緊張感があり、その中に心に響く音があって、聴いていて涙が出てきました。この演奏会の空間と一緒にいられたこと、本当に良かった。(東海村:R.S.さん)

1~3. 水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会  
4~6. 水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会

## プチ情報 速達

学芸員男子3人衆、水戸市国際交流センターに登場!  
水戸市内の「水戸市国際交流センター」に、音楽部門学芸員男子3人衆(関根哲也、中村 晃、矢澤孝樹)が登場し、連続トーク・シリーズを行います。タイトルは『連続講座 クラシック音楽でめぐるヨーロッパの街 Vol. 2 水戸室内管弦楽団がめぐる街を中心に』(主催:財団法人水戸市国際交流協会)。水戸室内管弦楽団が2006年の第3回ヨーロッパ・ツアーで訪れる3つの街(マドリッド、フィレンツェ、ウィーン)および2001年の第2回ヨーロッパ・ツアーで訪れたパリを取り上げ、それぞれ

の街が音楽史上のある時代でどんな輝きを見せていたか、トピックをしぼってお話、音楽、画像や映像をご紹介します。また学芸員が訪れて実際に見てきたそれぞれの街の現在の文化状況についてもお話しします。日時は2月1日(水)、8日(水)、15日(水)、22日(水)、いずれも18:30から2時間。参加費は全4回で2,000円、定員になり次第締切となります。申し込み開始は2006年1月12日(木)午前9時から。お問い合わせは財団法人水戸市国際交流協会(TEL029-221-1800)。月曜日・祝祭日は休館です。



\* nettama= ネットワークする猫 タマ。  
芸術館のコンサートをサカナにいるんなどころへnettamaします。

冬休みディスク三昧!

みなさんは、どんなやり方で1年をふりかえられていますか。僕は1年の最後に、ふだんなかなかまとまった時間をとって聴けない大曲を、無理やりにも時間をとってじっくり聴くことにしている。長い曲を、ほかのすべてをシャットアウトしてただひたすらじっと聴いていると、だんだん自分の中にたまっていた1年間の澱のようなものが溶け出して流れ、聴き終わる頃には不思議とすっきりした気持ちになる。

なにも皆さんにこのようなやり方をおすすめするというわけではないのだけれど、昨年同様、年末年始にじっくり聴きたいCDをご紹介しよう。せっかくなのでこれから先に行われる4つのコンサートと関連したCDを、何枚かセレクトして。

まず2月3日の『オペラの花束をあなたへ17幻想のルチア』から。ヒロインである佐藤美枝子さんは、1998年のチャイコフスキー・コンクールで優勝されて以来、着実なペースでCDを発表している。その第1弾は『至上のルチア』(ビクター VICC - 60130)。今回のステージで歌われる曲でもありチャイコフスキー・コンクールでもこの曲を歌って絶賛を博した。まさに佐藤さんの十八番の曲であるドニゼッティ ランメルモールのルチア からの“狂乱のルチア”が収められている。そのほかドリーブ ラクメ からの“鐘の歌”といった、やはり超絶的なアリアもあるし、ラフマニノフの ヴォカリーズ もあればバーンスタイン キャンディード から“着飾って、きらびやかに”があるという具合に、佐藤さんという歌手の魅力を幅広い角度から知ることができる内容だ。佐藤さんは引き続き第2弾として『アリア』(VICC 60225)を発表、ヴェルディ、プッチーニ、モーツァルト、ベッリーニらの名アリアを集めたアルバムを発表。そして第3弾『さくら横ちよう』(VICC - 60276)は日本歌曲集。最新盤は『チャイコフスキー歌曲集』(VICC - 60462)と、ヴァラエティに富んだ、しかも音楽的内容の濃いアルバムを次々と発表している。チャイコフスキーの歌曲なんて、なかなかまとまったアルバムがないだけに、とても貴重な内容だと思う。1年をアリアでゴージャスに締めくくるもよし、歌曲

でしっとりと終えるもよし。ちなみに ランメルモールのルチア の全曲盤ではなにがおすすめですか?と担当Sさんに聞いてみたら、「映像だったらステファニア・ボンファデッリが歌ったグレアム・ヴィック演出のもの(TDK - TDBA0074)CDだったらグルベローヴァがルチアを歌ったもの(ナイティンゲールKKCC4434~5)がおすすめです」とのことでした。

一方、1年のフィナーレを打楽器でにぎやかに飾り、ストレスをぜんぶ吹き飛ばすという手もある。2月11日に登場する『パーカッション・ミュージアム』だ。これまで出しているこの人たちのCDは『カルメン組曲』(キングKIC C432)『ボレロ/展覧会の絵』(KIC C344)『剣の舞』(KIC C383)『惑星』(KIC C432)!なんとまあ、フル・オーケストラの曲ばかりじゃないですか。リズムはもちろん、メロディも、ハーモニーも、弦楽器や木管楽器に負けにくいくらい鮮やかに奏して(叩いて?)しまふ彼らの妙技を聴けば、きっとたまっていたものもスッキリ解消、すがすがしく新年に臨めるのではないかな。ところで今回のパーカッション・ミュージアムのコンサートは、斬新で多彩な打楽器サウンドを聴かせてくれる現代の音楽が中心。「予習」するのでもいいけれど、まず実演で出会ってじっくりしていただき、それからあらためてCDのあるものは入手される、というのでもいいかも。でも、バーンスタインの ウェスト・サイド・ストーリー は、あらかじめオリジナルを聴いておくと、おもしろさ倍増かもしれない。演奏会用組曲として編曲された シンフォニック・ダンス もあるが、思い切ってオリジナル全曲盤を聴く、というのもこの際どうだろう。バーンスタイン本人が指揮し、キリ・テ・カナワとカレラスが歌った決定盤もあることだし(ドイツ・グラモフォン UCCG7092)。

2月14日の『ちょっとお昼にクラシック5 ピアノ四重奏・夢弦旅行』。これは出演者が専属楽団の人たちなどおなじみの顔ぶれであらためてご紹介するまでもないかもしれないけれど、久保陽子さんが水戸芸術館で録音した3枚のCD、名曲集『レジェンド』(KUBOYOKO KBYK - 1001)、『パッサ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタとパルティータ』(KBYK - 1002 ~ 1003)、『ブラ

ームス:ヴァイオリン・ソナタ(全3曲)』(KBYK - 1004)や、堀了介さんが仲道郁代さんと共にやはり水戸芸術館で録音した『シヨスタコヴィチ&フランク:チェロ・ソナタ』(フォンテックFOCD20024)など、まだの方はぜひ。ちなみに今回のメンバーにヴィオラの店村真積さんを加えた「桐五重奏団」も、フランクとサン=サーンスのピアノ五重奏曲のCDを出している(マイスター・ミュージックMM - 1102)。室内楽で心静かな年末を。

最後に3月12日の『びわ湖ホール声楽アンサンブル』。残念ながらまだこのグループはCDを発表していない。しかし、指揮する若杉弘さんが選んだプログラムは古今東西実に盛りだくさん。それぞれの曲をじっくり年末年始に聴きこみ、コンサートを楽しみに待つというのいいのでは。最初と最後に演奏されるブラームス 愛の歌 だったらガーディナー指揮モンテヴェルディ合唱団(フィリップス輸入盤)、ヴェッキの傑作マドリガル・コメディ パルナツス山をめぐり(ランフィバルナーゾ)なら芸達者のアンサンブル・クレマン・ジャヌカン(ハルモニア・ムンディ・フランス輸入盤)モンテヴェルディ 死なせてください にはコンチェルト・イタリアーノの艶やかな演奏(アルカナ輸入盤)、ドビュッシーの 神よ、美しき人を見るはよきかな はこれまたガーディナー指揮モンテヴェルディ合唱団(フィリップス輸入盤)、ウェーベルン: 軽やかな小舟にて逃れ出よ には若杉氏自身の指揮によるCDもある(ドイツ・ハルモニア・ムンディBVCD38067~8)。そしてプーランク 自由、これはザ・シックスティーンの演奏でこの 自由 が含まれたカントーラ 人間の顔 全曲を聴こう(ヴァージン・クラシックス輸入盤)。第2次大戦、占領下のパリでひそかに創られた感動的な抵抗の歌だ。戦争と平和について考えながら新年を迎えるというのも意義深い。というわけで皆さんの新年が希望と喜びに満ちたものでありますよう!

\*輸入盤は番号が変更になっている場合が多いので記載していません。どうぞご了承ください。

プーランク合唱曲集  
ザ・シックスティーン



